

国語は論理だけでいい。形式だけでいい。そう言われると不安に思う人もいるかもしれない。文章の意味や内容は、考えなくていいのか。そういった疑問があるのは、やむを得ないことである。論理や形式と意味や内容のどちらかということではなく、バランスの問題である。今までは、意味や内容に偏りすぎていたのではないか。もう少し、論理や形式のことも考えていこうということである。

A 「東軍は1位。西軍は2位です。」

B 「東軍は1位。でも、西軍は2位です。」

Aは、それぞれの順位を淡々と伝える文章である。それに対して、Bには、新たな意味が生まれている。西軍は、東軍よりもわるい結果だったという事実が強調されている。もし、アナウンスでBが流れたら、比較された西軍のメンバーは、嫌な気持ちになるだろう。AとBの意味する内容は、大きく異なっている。

内容に大きな影響を与えたものは何か。それは、「でも」という、たった2文字の言葉である。この言葉自体には、意味はない。きわめて形式的なものである。ところが、このたった2文字の形式が内容に与えた影響は測り知れない。このような形式を意図的に操作できれば、内容をも操作できるようになる。つまり、論理（形式）をコントロールできれば、文章の意味（内容）をコントロールできるということである。だからこそ、論理的思考力をつければ、国語力は確実に上がるのである。

論理的思考力とは何か。それは、バラバラの考えや言葉を整理する、関係づけるための力である。その過程は、3つに分類される。「言いかえる力」「比べる力」「たどる力」である。

言いかえる力は、一見バラバラに見えるものの中に、共通点を見つけ出し、整理する力である。それは、抽象化と具体化の力でもある。比べる力は、一見バラバラに見えるものの中に、対比関係を見つけ出し、整理する力である。たどる力は、一見バラバラに見えるものの中に、結びつきを見つけ出し、整理する力である。文章で言えば、原因と結果、つまり因果の結びつきをたどる作業になる。たどる力とは、因果関係を整理する力である。

これらは、ひとまず、だいたいのイメージである。論理的思考力を3つの力に限定するのはどうなのかという問題はある。だが、あれもこれもではなく、何事も絞ることは重要である。絞ることで取り組みやすくなる。絞ってはいるが、それが他のことにも波及するようになる。何ごととも3つである。これが大切なことである。